

日本経済新聞

がん死亡を減らすには 精密検査の「受診完了」が必須



がん検診は受診率を上げれば十分、ではありません。「要精密検査」となった人が検査を受け、がんが見つければ治療につなげる。この流れがあって初めて、がん死亡を減らすことにつながります。

東京都八王子市は大腸がん検診の検査キット送付や、行動経済学の「ナッジ」を活用した受診勧奨に取り組んできました。乳がん検診について、約1万2千円相当の検診を自己負担2千円で受けられることを「1万円分の割引チケット」と案内しました。受けないと損をするという心理に働きかけ、乳がん検診の受診率は呼びかけをしなかった場合の推計値の約4倍になりました。

同市が重視するのは検診の質です。市医師会と連携し、検診結果を分析して医療機関へ還元するとともに、精密検査の受診状況も追跡します。

2023年度の同市の69歳以下の精密検査受診率は、胃がんの内視鏡検診が100%。肺がんや乳がん、子宮頸（けい）がんは96～97%台と、国の目標である90%の水準を上回りました。大腸がんは90%にわずかに届かず、87.3%でした。

住民がん検診で精密検査の受診率が最も低いのが大腸がんです。便潜血検査が陽性でも「痔（じ）のせい」などと放置してはいけません。海外の研究でも、痔がある人とそうでない人の陽性率に有意な差はありませんでした。

前回紹介した大東建託は職域がん検診で精密検査の受診率100%を達成しています。本社や保健師らが連携し、受診が完了するまでフォローします。住民検診も職域検診も最後まで支える体制がカギを握ります。

八王子市の9月の啓発イベント「がんを知る教室」で、私も市民向けセミナーを行いました。東京医科大学八王子医療センターと東海大学医学部附属八王子病院の専門職も参加し、来場者のがん相談に応じました。

特に印象に残ったのが市立看護専門学校と東京純心大学看護学部の学生たちです。講演で予防や検診、早期発見について学んだ当日、来場者に自分の言葉で伝えました。私が取り組む「医学生による、学校でのがん教育」にもつながる、学園都市の強みを生かした活動です。

人に伝えるには、まず自分が理解する必要があります。年齢も背景も多岐にわたる市民に分かりやすく説明する経験は貴重で、座学では得られません。市の保健師や病院の医療者と一緒に活動することも、地域医療を学ぶよい機会になります。

次の世代を育てることもがん対策の一部です。検診の質を高める仕組みと地域を支える人づくり。八王子市の取り組みには要注目です。

2026年10月21日